

ガッコウ

おじいさんのランプ

氏名〔

〕

おじいさんのランプ 1

かくれんぼで、倉の隅にもぐりこんだ東一君がランプを持って出て来た。

それは珍しい形のランプであった。八十糎ぐらゐの太い竹の筒が台になっていて、その上にちよつぴり火のともる部分がくつついている、そしてほやは、細いガラスの筒であった。はじめに見るものにはランプとは思えないほどだった。

そこでみんなは、昔の鉄砲とまちがえてしまった。

「何だア、鉄砲かア」と①鬼の宗八君はいった。

東一君のおじいさんも、しばらくそれが何だかわからなかった。眼鏡越しにじっと見ていてから、はじめてわかったのである。

ランプであることがわかると、東一君のおじいさんはこういって子供たちを叱りはじめた。

「こらこら、お前たちは何を持出すか。まことに子供というものは、黙って遊ばせておけば何を持出すやらわけのわからん、②油断も〇〇もない、ぬすっと猫のようなものだ。こらこら、

③それはここへ持って来て、お前たちは外へ行って遊んで来い。外に行けば、電信柱でも何でも遊ぶものはいくらでもあるに」

こうして叱られると子供ははじめて、自分がよくない行いをしたことがわかるのである。そこで、ランプを持出した東一君はもちろんのこと、何も持出さなかった近所の子供たちも、自分たちみんなで悪いことをしたような顔をして、④すぐすぐと外の道へ出ていった。

外には、春の昼の風が、ときおり道のほこりを吹立ててすぎ、のろのろと牛車を通ったあとを、白い蝶がいそがしそうに通つてゆくこともあった。(5) 電信柱があつちこつちに立っている。(6) 子供たちは電信柱なんかで遊びはしなかった。大人が、こうして遊ぶべといったことを、いわれたままに遊ぶというのは何となくばかっているように子供には思えるのである。そこで子供たちは、ポケットの中のラムネ玉をカチカチいわせながら、広場の方へとんでいった。そしてまもなく自分たちの遊びで、さっきのランプのことは忘れてしまった。

日ぐれに東一君は家へ帰って来た。奥の居間のすみに、あのランプがおいてあった。しかし、ランプのことを何かいうと、またおじいさんに⑦がみがみいわれるかも知れないので、黙っていた。

問一 ― ①とありますが、子供たちは何をして遊んでいましたか。文中から探し、書きぬきなさい。

問二 ― ②とありますが、「ほんの少しも油断することができない」という意味になるように、「〇〇」にあてはまるひらがな二字を答えなさい。

問三 ― ③とありますが、何のことですか。もつともふさわしいものをア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 竹の筒 イ ガラスの筒 ウ ランプ エ 鉄砲

問四 ― ④とありますが、どういう意味ですか。もつともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 元気がない様子で
イ すごいきおいで
ウ 楽しそうに笑って

問五 ― ⑤にあてはまる言葉としてもつともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア なんと イ なるほど ウ おそらく

問六 ― ⑥にあてはまる言葉としてもつともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ だから ウ また

問七 ― ⑦とありますが、何をいわれるのですか。もつともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 外へ行って遊んで来いと命令される。
イ ランプを持ち出したことをしかられる。
ウ 自分たちの遊びをしたことをほめられる。

おじいさんのランプ2

夕御飯のあとの退屈たいくつな時間が来た。東一君はたんすにもたれて、ひき出しのかんをカタンカタンといわせていたり、店に出てひげを生はやした農学校の先生が『大根栽培だいこんの理論と実際』というような、むつかしい名前の本を番頭に注文するところを、じつと見ていたりした。

そういうことにも飽あくと、また奥の居間にもどって来て、おじいさんがいないのを見すまして、ランプのそばへにじりより、そのほやをはずしてみたり、五銭白銅貨はくどうかほどのねじをまわして、ランプの①芯しんを出し〇〇ひっこめ〇〇〇〇していった。

すこしいっしょうけんめいになっていじくっていると、またおじいさんにみつかってしまった。

（2）こんどはおじいさんは叱しからなかった。③ねえやにお茶をいいつけておいて、すっぽんと煙管筒きせるづつをぬきながら、こころいった。

「東坊、このランプはな、おじいさんにはとてもなつかしいものだ。長いあいだ忘れておったが、きょう東坊が倉すみの隅から持出して来たので、また昔のことを思い出したよ。こうおじいさんみたくに年をとると、ランプでも何でも昔のものに出合うのがとても嬉しいもんだ」

東一君は④ぼかんとしておじいさんの顔を見ていた。おじいさんはがみがみと叱しかりつけたから、怒おこっていたのかと思つたら、昔のランプに逢あうことができて喜んでいたのである。

「ひとつ昔の話をしてやるから、こころ来て坐すわれ」
とおじいさんがいった。

東一君は話が好きだから、いわれるままにおじいさんの前へいつて坐つたが、何だか⑤お説教おせきをされるときのようで、いごこちがよくないので、いつもうちで話をきくときにとる姿勢をとつて聞くことにした。（6）寝ねそべって両足をうしろへ立てて、ときどき足の裏をうちあわせる⑦芸当げんどうをしたのである。

おじいさんの話というのは次のようであった。

問一 ——①とありますが、「同じ動作を何度もくり返す」という意味になるように、二つある「○○」にあてはまるひらがな二字の言葉を考えて入れなさい。

問二 (2) にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。
ア けれど イ だから ウ なぜなら

問三 ——③とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。
ア お姉さん イ お手伝いさん ウ おばあさん

問四 ——④とありますが、なぜですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。
ア おじいさんがランプのことを長いあいだ忘れていたことに腹が立ったから。
イ おじいさんがお茶を自分でいれようとしなかったことが許せなかったから。
ウ おじいさんは怒っていると思っていたのに喜んでいたのが意外だったから。

問五 ——⑤とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。
ア きびしく言い聞かせること イ わかりやすい説明 ウ 長い思ひ出話

問六 (6) にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。
ア すると イ つまり ウ しかし

問七 ——⑦とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。
ア 芸術的な美しい動きをしたということ。
イ 人をおどろかせるような動きをしたということ。
ウ 訓練された難しい動きをしたということ。

おじいさんのランプ 3

今から五十年ぐらいまえ、ちょうど日露戦争のじぶんのことである。岩滑新田の村に巳之助という十三の少年がいた。

巳之助は、父母も兄弟もなく、親戚のものとして一人もない、まったくのみなしごであった。そこで巳之助は、よその家の走り使いをしたり、女の子のように子守をしたり、米を搗いてあげたり、そのほか、巳之助のような少年にできることなら何でもして、村に置いてもらっていた。けれども巳之助は、こうして村の人々の御世話で生きてゆくことは、ほんとうをいえばいやであった。子守をしたり、米を搗いたりして一生を送るとするなら、男とうまれた甲斐がないと、つねづね思っていた。

男子は①身を立てねばならない。しかしどうして身を立てるか。巳之助は毎日、②ご飯を喰べてゆくのやつとのことであった。本一冊買うお金もなかったし、またたといお金があつて本を買ったとしても、読むひまがなかった。

身を立てるのによいきっかけがないものと、巳之助はころろひそかに待っていた。すると或る夏の日のひるさがり、巳之助は人力車の先綱を頼まれた。

その頃岩滑新田には、いつも二、三人の人力曳がいた。潮湯治（海水浴のこと）に名古屋から来る客は、たいてい汽車で半田まで来て、半田から知多半島西海岸の大野や新舞子まで人力車でゆられていったもので、岩滑新田はちょうどその道すじにあたっていたからである。

人力車は人が曳くのだからあまり速くは走らない。それに、岩滑新田と大野の間には峠があるから、よけい時間がかかる。おまけにその頃の人力車の輪は、ガラガラと鳴る重い鉄輪だったのである。そこで、急ぎの客は、賃銀を倍出して、③二人の人力曳にひいてもらうのであった。巳之助に先綱曳を頼んだのも、急ぎの避暑客であった。

巳之助は人力車のながえにつながれた綱を肩にかついで、夏の入陽のじりじり照りつける道を、えいやえいやと走った。馴れないこととてたいそう苦しかった。しかし巳之助は苦しきなど気にしなかった。④好奇心でいっぱいだった。(5) 巳之助は、⑥物ごころがついてから、村を一步も出たことがなく、峠の向こうにどんな町があり、どんな人々が住んでいるか知らなかったからである。

問一 ― ①とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 良い仕事をして立派な人物にならなければならない。
- イ 背すじを立てた正しい姿勢でいなければならない。
- ウ 座ったりせずいつも立っていないなければならない。

問二 ― ②とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア ご飯を食べるのにやっと足りるほどの金額しかかせげないということ。
- イ ご飯を食べる時間もほとんどないほどいつもいそがしいということ。
- ウ ご飯を食べるくらいなら本を買ったほうがましだということ。

問三 ― ③とありますが、なぜですか。その理由を次のようにまとめました。空らんにあてはまる言葉を文中から探し、それぞれ指定された字数で書きぬきなさい。

(ア・三字) は人が曳くので速くは走らず、途中には峠もあるので (イ・二字) がかかり、さらに車輪が鉄輪だったのでとても (ウ・二字) ため、急ぎの場合は二人で曳かねばならないから。

問四 ― ④とありますが、これを言いかえた表現としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア わくわく
- イ しぶしぶ
- ウ しくしく

問五 (5) にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア しかし
- イ だから
- ウ なぜなら

問六 ― ⑥とありますが、これを言いかえた表現としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 世の中のことが何となくわかり始めた幼いころ。
- イ 物にも心があるのだと教えてもらった遠い昔。
- ウ お金や物が無いのはつらいことだと知った時。

おじいさんのランプ 4

日が暮れて青い夕闇ゆうやみの中を人々がほの白くあちこちする頃、人力車は大野の町にはいった。巳之助は①その町でいろいろな物をはじめて見た。軒のきをならべて続いている大きい商店が、第一、巳之助には珍めづらしかった。巳之助の村にはあきないやとては一軒しかなかった。駄菓子だがし、草鞋わらじ、糸繰いとくりの道具、膏藥こうやく、貝殻かいがらにはいった目薬、そのほか村で使つかうたいいていの物を売うっている小さな店が一軒きりしかなかったのである。

しかし巳之助をいちばんおどろかしたのは、その大きな商店が、一つ一つともしている、花のように明かるいガラスのランプであった。巳之助の村では夜はあかりなしの家が多かった。まっくらな家の中を、人々は盲めくらのように手でさぐりながら、水甕みずがめや、石臼いしうすや大黒柱だいこくばしらをさぐりあてるのであった。すこしぜいたくな家では、おかみさんが嫁入りよめいのとき持もって来た行燈あんどんを使うのであった。行燈は紙を四方に張りめぐらした中に、油のはいった皿さらがあつて、その皿のふちにのぞいている燈心とうしんに、桜の蒼つばみぐらいの小さいほのおがともると、まわりの紙にみかん色のあたたかな光がさし、附近は少し明かるくなったのである。しかしどんな行燈にしろ、巳之助が大野の町で見たランプの明かるさにはとても②及およばなかった。

それにランプは、その頃としてはまだ珍らしいガラスでできていた。煤すすけたり、破やぶれたりしやすい紙でできている行燈より、これだけでも巳之助にはいいもののように思おもわれた。

このランプのために、大野の町ぜんたいが竜宮城りゅうぐうじょうかなにかのように明かるく感じられた。もう巳之助は③自分の村へ帰りたくないと思おもった。人間は誰でも明かるいところから暗いところへ帰るのを好まないのである。

巳之助は④駄賃だちんの十五銭を貰もらうと、人力車とも別れてしまつて、お酒にでも酔よつたように、波の音のたえまないこの海辺の町を、珍らしい商店をのぞき、美しく明かるいランプに見とれて、さまよつていた。

呉服屋では、番頭つばきさんが、椿つばきの花を大きく染め出した反物たんものを、ランプの光の下にひろげて客に見せていた。穀屋こくやでは、小僧こぞうさんがランプの下で小豆あずきのわるいのを一粒ずつ拾あひ出だして見みた。また或ある家では女の子が、ランプの光の下に白くひかる貝殻を散ちらしておはじきをしていた。また或る店ではこまかい珠たまに糸を通して数珠じゆずをつくつていた。ランプの青やかな光のもとでは、⑤人々のこつした生活も、物語か幻燈げんとうの世界でのように美しくなつて見えた。

巳之助は今までなんども、「文明開化で⑥世の中がひらけた」ということをきいていたが、今はじめて文明開化ということがわかつたような気がした。

問一 ― ①とありますが、「その町」は何という町ですか。文中から探し、漢字で答えなさい。

問二 ― ②とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア くらべものにならなかった。

イ ほのおがあたたかかった。

ウ とても明るくなった。

問三 ― ③とありますが、なぜこのように思ったのですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア ランプが珍しいのでずっと見ていたかったから。

イ 自分の村にはランプがないため真っ暗だから。

ウ 夜になったのでこれから帰るのは面倒だから。

問四 ― ④とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア お酒の代金 イ ほうびとしてもらったお金 ウ 思いがけないおこづかい

問五 ― ⑤とありますが、「人々のこころした生活」にあてはまらないものをア～ウから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 呉服屋で番頭さんが反物をひろげて客に見せている。

イ 穀屋で小僧さんが小豆のわるいのを拾い出している。

ウ 手さぐりで水甕や石臼や大黒柱をさぐりあてている。

エ 女の子がひかる貝殻を散らしておはじきをしている。

オ 町で巳之助が美しく明かるいランプに見とれている。

問六 ― ⑥とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 世の中のいろいろなものが進歩した。

イ 世の中が大きく変化して住みにくくなった。

ウ 世の中をおどろかすような事件が起こった。

おじいさんのランプ5

歩いているうちに、巳之助は、様々なランプをたくさん吊^{つる}してある店のまえにきた。これはランプを売っている店にちがいない。

巳之助はしばらくその店のまえで十五銭を握りしめながら①ためらっていたが、やがて決心して②つかつかとはいつていった。

「ああいうものを売ってくれや」

と巳之助はランプをゆびさしていった。まだランプという言葉を知らなかったのである。

店の人は、巳之助がゆびさした大きい吊^{つり}ランプをはずして来たが、それは十五銭では買えなかった。

「③負けとくれや」

と巳之助はいった。

「そうは負からん」

と店の人は答えた。

「卸^{おろし}値で売ってくれや」

巳之助は村の雑貨屋へ、作った草鞋^{わらじ}を買ってもらいによく行ったので、物には卸^こ値と小売^{うり}値があつて、卸^お値は（4）ということを知っていた。たとえば、村の雑貨屋は、巳之助の作った瓢^{ひょう}箆^{たん}型の草鞋を卸^お値の一銭五厘^{りん}で買いつつて、人力^{じんりき}曳^ひたちに小売^こ値の二銭五厘で売っていたのである。

ランプ屋の主人は、⑤見^みも知らぬどこかの小僧^{こぞう}がそんなことをいったので、びっくりしてまじまじと巳之助の顔を見た。そしていった。

「卸^お値で売れつて、そりや相手がランプを売る家なら卸^お値で売つてあげてもいいが、一人一人のお客に卸^お値で売るわけにはいかな」

「ランプ屋なら卸^お値で売ってくれるだのイ？」

「ああ」

「そんなら、おれ、ランプ屋だ。卸^お値で売ってくれ」

⑥店の人はランプを持ったまま笑い出した。

「おめえがランプ屋？ はッはッはッはッ」

「ほんとうだよ、おツつあん。おれ、ほんとうにこれからランプ屋になるんだ。な、だから頼^{たの}むに、今日^{きょう}は一つだけんど卸^お値で売ってくれや。こんど来るときや、たくさん、いっぺんに買うで」

問一 ―― ①とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 決心がつかず迷う

イ くやしさをこらえる

ウ だめだとあきらめる

問二 ―― ②とありますが、この表現を言いかえた場合、もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 遠慮えんりょしながら

イ いきおいよく

ウ 恥ずかしそうに

問三 ―― ③とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 勝負してほしいということ。

イ 安くしてほしいということ。

ウ 仲良くなりたいということ。

問四 (4) とありますが、ここには「高い」「安い」のどちらかが入ります。どちらが入りますか。答えなさい。

問五 ―― ⑤とありますが、だれのことですか。文中から探し、書きぬきなさい。

問六 ―― ⑥とありますが、なぜ笑ったのですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア まだ子どもである巳之助がランプ屋になるとは信じられなかったから。

イ 巳之助がランプを卸値で売ってくれと言ったのがおもしろかったから。

ウ 巳之助がランプを気に入ってくれたことがわかってうれしかったから。

店の人ははじめ笑っていたが、巳之助の真剣なようすに動かされて、いろいろ巳之助の①身の上をきいたうえ、

「よし、そんなら卸値で②こいつを売ってやろう。ほんとは卸値でもこのランプは十五銭じゃ売れないけど、おめえの熱心なのに感心した。負けてやろう。そのかわりしっかりしようばいをやれよ。うちのランプをどんどん持ってって売ってくれ」

と云って、ランプを巳之助に渡した。

巳之助はランプのあつかい方を一通り教えてもらい、ついでに提燈ちようちんがわりにそのランプをともして、村へむかった。

藪やぶや松林のうちつづく暗い峠道でも、巳之助はもう恐こわくはなかった。花のように明かるいランプをさげていたからである。

巳之助の胸の中にも、もう一つのランプがもっていた。文明開化に遅れた自分の暗い村に、このすばらしい③文明の利器を売りこんで、村人たちの生活を明かるくしてやろうという

(4) のランプが――

巳之助の新しいしょうばいは、はじめのうちまるではやらなかった。百姓たちは何でも新しいものを信用しないからである。

そこで巳之助はいろいろ考えたあげく、村で一軒きりのあきないやへそのランプを持って行って、ただで貸してあげるからしばらくこれを使って下さいと頼んだ。

雑貨屋の婆ばあさんは、しぶしぶ承知して、店の天井くぎに釘を打ってランプを吊し、その晩からともした。

五日ほどたつて、巳之助が草鞋を買ってもらいに行くとき、雑貨屋の婆さんはにこにこしながら、こりやたいへん便利で明かるうて、夜でもお客がよう来てくれるし、釣銭つりせんをまちがえることもないので、気に入ったから買いましたよ、といった。その上、ランプのよいことがはじめてわかった村人から、もう三つも注文のあったことを巳之助にきかしてくれた。巳之助はとびたつように喜んだ。

そこで雑貨屋の婆さんからランプの代と草鞋の代を受けると、すぐ⑤その足で、走るようにして大野へいった。そしてランプ屋の主人にわけを話して、足りないところは貸してもらい、三つのランプを買って来て、注文した人に売った。

これから巳之助のしょうばいははやって来た。

問一 ― ①とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 身長や体重はどれくらいか
- イ どんな人生を送ってきたか
- ウ いくらお金を持っているか

問二 ― ②とありますが、何のことですか。文中から探し、書きぬきなさい。

問三 ― ③とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 新しく生まれた便利な道具
- イ 百姓たちが好きそうな道具
- ウ 文章を読むのに役立つ道具

問四 (4) にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 希望 イ 失望 ウ 欲望

問五 ― ⑤とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の足で
- イ 少し休んでから
- ウ そのままのいきおいで

問六 ここまでの話の中で、巳之助のランプはいくつ売れましたか。

はじめは注文をうけただけ大野へ買いにいつていたが、少し金がたまると、注文はなくてもた
くさん買いこんで来た。

そして今はもう、①よその家の走り使いや子守をすることはやめて、ただランプを売るしよ
うばいだけにうちこんだ。物干台ものほしだいのようなわく、のついた車をしたてて、それにランプやほやなど
をいっぱい吊つるし、ガラスの触れあう涼しい音をさせながら、巳之助は自分の村や附近の村々へ売
りにいった。

巳之助はお金も儲もつかったが、それとは別に、このしょうばいがたのしかった。今まで暗かっ
た家に、だんだん巳之助の売ったランプがともつてゆくのである。暗い家に、巳之助は文明開化
の明かるい火を一つ一つともしてゆくような気がした。

巳之助はもう②青年せいねんになっていた。それまでは自分の家とはなく、区長さんのところの軒のき
かたむいた納屋なやに住ませてもらっていたのだが、小金がたまつたので、自分の家もつくつた。す
ると世話してくれる人があつたのでお嫁よめさんももらった。

或あるとき、よその村でランプの宣伝をしておつて、「ランプの下ならたたみの上に新聞をおいて
読むことが出来るのイ」と区長さんに以前きいていたことをいうと、お客さんの一人が「ほんと
かん？」とききかえしたので、嘘うそのきらいな巳之助は、③自分でためして見る気になり、区長
さんのところから古新聞をもらつて来て、ランプの下にひろげた。

(4) 区長さんのいわれたことはほんとうであつた。新聞のこまかい字がランプの光で一
つ一つはつきり見えた。「わしは嘘をいつてしようばいをしたことにはならない」と巳之助はひ
とりごとをいつた。(5) 巳之助は、字がランプの光ではつきり見えても何にもならなかつ
た。字を読むことができなかったからである。

「ランプで物はよく見えるようになったが、字が読めないじゃ、まだほんとうの文明開化じゃね
え」

そういつて巳之助は、それから毎晩区長さんのところへ字を教えてもらいにいつた。

熱心だつたので一年もすると、巳之助は尋常科じんじょうかを卒業した村人の⑥誰にも負けなくらい読
めるようになった。

そして巳之助は書物しょもつを読むことをおぼえた。

問一 ——①とありますが、なぜやめたのですか。理由を次のようにまとめました。空らんには当てはまる言葉を文中から探し、指定された字数で書きぬきなさい。

巳之助は、（ア・二字）が儲かったこととは別に、ランプを売るといふしょうばいが（イ・六字）から。

問二 ——②とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア わかもと イ おじさん ウ としより

問三 ——③とありますが、何をためすのですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 巳之助は本当に嘘がきらいかどうか。
イ 区長さんが古新聞をくれるかどうか。
ウ ランプの下で新聞が読めるかどうか。

問四 ——④にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア やはり イ しかし ウ だから

問五 ——⑤にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア やはり イ しかし ウ なぜなら

問六 ——⑥とありますが、なぜですか。理由を次のようにまとめました。空らんには当てはまる言葉を文中から探し、二字で書きぬきなさい。

巳之助は毎晩区長さんに字を教えてもらいに行き、（ ）に勉強したから。

巳之助はもう、男ざかりの大人おとなであった。家には子供が二人あった。「自分もこれでどうやらか①ひとり立ちができたわけだ。まだ身を立てるといふところまではいっていないけれども」と、ときどき思つて見て、そのつど心に満足を感じるのであった。

(2) 或る日、巳之助がランプの芯しんを仕入れに大野の町へやって来ると、五、六人の人夫にんぶが道のはたに穴を堀り、太い長い柱を立てているのを見た。その柱の上の方には腕うでのような木が二本ついていて、その腕木には白い瀬戸物せともののたるまさんのようなものがいくつかのついていた。こんな奇妙なものを道のわきに立てて何にするのだろう、と思ひながら少し先にゆくと、また道ばたに同じような高い柱が立っていて、それには雀すずめが腕木にとまって鳴いていた。

この奇妙な高い柱は五十メートル米 ぐらい間をおいては、道のわきに立っていた。

巳之助はついに、ひなたでうどんを乾ほしている人にきいてみた。すると、うどんやは「電気とやらいうもんが今度ひけるだけな。それでも、(3) はいらんようになるだけな」と答えた。

巳之助にはよく④のみこめなかつた。電気のことなどまるで知らなかつたからだ。ランプの代りになるものらしいのだが、そうとすれば、電気というものはあかりにちがいあるまい。あかりなら、家の中にもせばいいわけで、何もあんなとてつもない柱を道のくろに何本もおっ立てることはないじゃないかと、巳之助は思つたのである。

それから一月ほどたつて、巳之助がまた大野へ行くと、この間立てられた道のはたの太い柱には、黒い綱つなのようなものが数本わたされてあつた。黒い綱は、柱の腕木にのつているたるまさんの頭を一まきして次の柱へわたされ、そこでまたたるまさんの頭を一まきして次の柱にわたされ、こうしてどこまでもつづいていた。

注意してよく見ると、ところどころの柱から黒い綱が二本ずつたるまさんの頭のところまで別れて、家の軒端のきはにつながれているのであつた。

「へへえ、電気とやらいうもんはあかりがともるもんかと思つたら、これはまるで綱じゃねえか。雀つばめや 燕つばめのええ休み場というもんよ」

と巳之助が一人で⑤あざわらいながら、知合いの甘酒屋にはいつてゆくと、いつも土間どまのまん中の飯台の上に吊してあつた大きなランプが、横の壁の辺に取りかたづけられて、あとにはその

⑥ランプをずっと小さくしたような、石油入れのついていない、変なかつここのランプが、丈夫じょうぶ そうな綱で天井からぶらさげられてあつた。

問一 ― ①とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 自信をもって、自分は男だと言えること。

イ ひとりぼっちでも、孤独に耐えて生きること。

ウ だれの力も借りずに、自分の力で生活すること。

問二 (2) にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア では イ さて ウ だから

問三 (3) にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア ランプ イ 電気 ウ うどん

問四 ― ④とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 理解できなかったということ。

イ 何も飲めなかったということ。

ウ 話ができなかったということ。

問五 ― ⑤とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア うれしくて笑う イ やさしくほほえむ ウ ばかにして笑う

問六 ― ⑥とありますが、ここでは何を指しますか。文中から探し、漢字二字で書きぬきなさい。

「何だやい、変なものを吊したじゃねえか。あのランプはどこか悪くでもなったかやい」と巳之助はきいた。すると甘酒屋が、

「ありや、こんどひけた電気というもんだ。火事の心配がのうて、明かるうて、マッチはいらぬし、なかなか便利なもんだ」

と答えた。

「へッ、へんで、これんなものをぶらさげたもんよ。これじゃ甘酒屋の店も何だか間がぬけてしまった。客もへるだろうよ」

甘酒屋は、相手がランプ売であることに気がついたので、①電燈の便利なことはもういわなかつた。

「なア、甘酒屋のとツつあん。見なよ、あの天井のそこを。ながねんのランプの煤すすであそこだけ真黒になつとるに。ランプはもうあそこについてしまったんだ。今になって電気たらいう便利なもんができたからとて、あそこからはずされて、あんな壁のすみっこにひっかけられるのは、ランプがかわいそうよ」

こんなふうに巳之助はランプの②肩をもって、電燈のよいことはみとめなかった。

ところでまもなく晩になって、誰もマッチ一本すらなかったのに、とつぜん甘酒屋の店が真昼のように明かるくなつたので、巳之助はびっくりした。あまり明かるいので、巳之助は思わずうしろをふりむいて見たほどだった。

「巳之さん、これが電気だよ」

巳之助は③齒をくいしばって、ながいあいだ電燈を見つめていた。敵かたきでも睨にらんでいるようなかおつきであった。あまり見つめていて眼のたまが痛くなつたほどだった。

「巳之さん、そういつちや何だが、とてもランプで④太刀たちうちができないよ。ちよつと⑤外へくびを出して町通りを見てごらんよ」

巳之助はむつつりと入口の障子しょうじをあけて、通りをながめた。どこの家どこの店にも、甘酒屋のと同じように明かるい電燈がともっていた。光は家の中にあまつて、道の上にまでこぼれ出ていた。ランプを見なれてきた巳之助にはまぶしすぎるほどのあかりだった。巳之助は、くやしさに肩でいきをしながら、これも長い間ながめていた。

ランプの、⑥でこわいかたきが出て来たわい、と思った。いぜんには文明開化ということをよく言っていた巳之助だったけれど、電燈がランプよりいちだん進んだ文明開化の利器であるということは分らなかつた。りこうな人でも、自分が職を失うかどうかというようなときには、物事の判断が正しくつかなくなることがあるものだ。

問一 —— ①とありますが、なぜですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 巳之助には電気のことを言ってもわからないから。
- イ ランプ売の巳之助を傷つけないよう気づかったから。
- ウ 巳之助に甘酒屋の店をけなされて腹が立ったから。

問二 —— ②とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしくないものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 味方をする
- イ ひいきをする
- ウ けんかをする

問三 —— ③とありますが、このときの巳之助の気持ちとして、もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア くやしさをこらえている。
- イ 虫歯が痛いのでつらい。
- ウ 明るい電気に感心している。

問四 —— ④とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア ランプを武器にして敵と戦うことができないということ。
- イ 明るさにおいてランプは電燈にかなわないということ。
- ウ ランプを売っている巳之助は甘酒屋より弱いということ。

問五 —— ⑤とありますが、何のためですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 電気の明るさを改めて確認するため。
- イ 目が痛くなったのをやわらげるため。
- ウ 話に飽きたので気分転換をするため。

問六 —— ⑥とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 手の力が強い敵
- イ おそろしい機械
- ウ 簡単には勝てない相手

その日から巳之助は、電燈が自分の村にもひかれるようになることを、心ひそかにおそれていた。電燈がともるようになれば、村人たちはみんなランプを、あの甘酒屋のしたように壁の隅につるすか、倉の二階にでもしまいこんでしまおうだろう。ランプ屋のしようばいはいらなくなるだろう。

(1)、ランプでさえ村へはいつて来るにはかなりめんどうだったから、電燈となつては村人たちはこわがつて、なかなか寄せつけることではあるまい、と巳之助は、一方では安心もしていた。

しかし間もなく、「こんどの村会で、村に電燈を引くかどうかを決めるだけな」という噂うわさをきいたときには、巳之助は②脳天に一撃をくらったような気がした。強敵いよいよござんなれ、と思った。

そこで巳之助は黙つてはいられなかった。村の人々の間に、電燈(3)の意見をまくしたてた。

「電気というものは、長い線で山の奥からひっぱつて来るもんだでのイ、その線をば夜中に狐きつねや狸たぬきがつたつて来て、この近きんぺんの田畠たはたを荒らすことは④うけあいだね」

こういうばかばかしいことを巳之助は、自分の馴なれたしようばいを守るためにいうのであった。それをいうとき何か⑤うしろめたい気がしたけれども。

村会がすんで、いよいよ岩滑新田やなべしんでんの村にも電燈をひくことにきまつたと聞かされたときにも、巳之助は脳天に一撃をくらったような気がした。こうたびたび一撃をくらつてはたまらない、頭がどうかなつてしまふ、と思つた。

その通りであつた。頭がどうかなつてしまった。村会のあとで三日間、巳之助は昼間もふとんをひつかぶつて寝ていた。その間に頭の調子が狂つてしまつたのだ。

巳之助は誰かを怨うらみたくてたまらなかつた。そこで村会で議長ぎぎの役をした区長さんを怨むことにした。そして区長さんを怨まねばならぬわけをいろいろ考えた。⑥へいぜいは頭のよい人でも、しようばいを失うかどうかというようなせとぎわでは、正しい判断をうしなうものである。とんでもない怨いみを抱いだくようになるものである。

問一 (1) にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア だが イ さて ウ だから

問二 —— ②とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 頭をなぐられたような激しいショックを受けたということ。

イ 天にもものぼるような喜びでいっぱいになったということ。

ウ 強敵の攻撃を受け、勇気を出して立ち向かったということ。

問三 (3) とありますが、ここには「賛成」「反対」のどちらかが入ります。どちらが入りますか。答えなさい。

問四 —— ④とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 注文を受ける イ 確実にそうなる ウ ありえない

問五 —— ⑤とありますが、なぜですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 狐や狸が村の田畠を荒らしたのは巳之助のせいだから。

イ ばかばかしいことを言って村の人々を喜ばせたから。

ウ 自分のしょうばいを守るために出まかせを言ったから。

問六 —— ⑥とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 現代 イ 昔 ウ ふだん

菜の花ばたの、あたたかい月夜であった。どこかの村で春祭の支度したくに打つ太鼓たいこがとほとほと聞えて来た。

巳之助は道を通ってゆかなかつた。みぞの中を鼯いたちのように身をかがめて走ったり、藪やぶの中を捨犬すていぬのようにかきわけたりしていった。他人に見られたくないとき、人はこうするものだ。

区長さんの家には長い間①やつかいになつていたので、よくその様子はわかつていた。火をつけるにいちばん都合のよいのは藁屋根わらやねの牛小屋であることは、もう家を出るときから考えていた。母屋おもやはもうひっそり寝しずまっていた。牛小屋もしずかだつた。しずかだといつて、牛は眠っているかめざめているかわかつたもんじゃない。牛は起きていても寝ていてもしずかなものだから。もつとも牛が眼めをさましていたつて、火をつけるにはいつこうさしかえないわけだけども。

巳之助はマッチのかわりに、マッチがまだなかつた②じぶん使われていた火打ひうちの道具を持つて来た。家を出るとき、かまどのあたりでマッチを探さがしたが、どうしたわけかなかなか見つからないので、手にあつたのをさいわい、火打の道具を持つて来たのだつた。

巳之助は火打で火を切りはじめた。火花は飛んだが、ほくちがしめっているのか、ちつとも燃えあがらないのであつた。巳之助は火打というものは、あまり便利なものではないと思つた。火が出ないくせにカチカチと大きな音ばかりして、これでは寝ている人が眼をさましてしまうのである。

「ちえッ」と巳之助は舌打ちしていった。「マッチを持つて来りやよかつた。こげな火打みてえな古くせえもなア、いざというとき③間にあわねえだなア」

そういつてしまつて巳之助は、ふと自分の言葉をききとがめた。

「古くせえもなア、いざというとき間にあわねえ、……古くせえもなア間にあわねえ……」

ちようど月が出て空が明るくなるように、巳之助の頭がこの言葉をきつかけにして明るく晴れて来た。

巳之助は、今になつて、自分のまちがつていたことがはつきりとわかつた。——ランプはもはや(4)道具になつたのである。電燈という(5)いつそう便利な道具の世の中になつたのである。それだけ世の中がひらけたのである。文明開化が進んだのである。巳之助もまた日本のお国の人間なら、日本がこれだけ進んだことを喜んでいいはずなのだ。古い自分のしょうばいが失われるからとて、世の中の進むのじやましようとしたり、⑥何の怨うらみもない人を怨んで火をつけようとしたのは、男として何という見苦しいさまであつたことか。世の中が進んで、古いしょうばいがいらなくなれば、男らしく、すっぱりそのしょうばいは棄すてて、世の中のためになる新しいしょうばいにかわろうじゃないか。——

巳之助はすぐ家へ⑦とつてかえした。

問一 ― ①とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア いたずらばかりしていたということ。

イ 住まわせてもらっていたということ。

ウ ひどく迷惑をかけていたということ。

問二 ― ②とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア とき イ 自分自身 ウ 何千年もの昔

問三 ― ③とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 遅刻してしまう イ 役に立たない ウ 火がつけられない

問四 ― (4) (5)とありますが、ここにはそれぞれ「新しい」「古い」のどちらかが入ります。それぞれどちらが入りますか。答えなさい。

問五 ― ⑥とありますが、その内容を次のようにまとめました。空らんにあてはまる人物を文中から探し、それぞれ書きぬきなさい。

(ア) が、本来なら何の怨みもないはずの(イ)の家に火をつけようとした。

問六 ― ⑦とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 引き返す イ 取ってくる ウ 借りたものを返す

そしてそれからどうしたか。

寝ている①おかみさんを起して、今家にあるすべてのランプに石油をつがせた。

おかみさんは、こんな夜更けよふに何をするつもりか巳之助にきいたが、巳之助は自分がこれからしようとしていることをきかせれば、おかみさんが止めるにきまっているので、黙っていた。

ランプは小ささまさまのがみなで五十ぐらいあった。それにみな石油をついだ。そしていつもあきないに出るときと同じように、車にそれらのランプをつるして、外に出た。こんどはマッチを忘れずに持って。

道が西の峠とこげにさしかかるあたりに、半田池はんだいけという大きな池がある。春のことでいっばいたたえた水が、月の下で銀盤ぎんばんのようにけぶり光っていた。池の岸にははんの木や柳やなぎが、水の中をのぞくようになかつこうで立っていた。

巳之助は人気ひとけのないここを選んで来た。

さて巳之助はどうするとうのだろう。

巳之助はランプに火をともした。一つともしては、それを池のふちの木の枝に吊した。小さいのも大きいのも、とりまぜて、木にいっばい吊した。一本の木で吊しきれないと、そのとなりの木に吊した。こうしてとうとうみんなのランプを三本の木に吊した。

風のない夜で、ランプは一つ一つがしずかにもまじろがず、燃え、あたりは昼のように明かるくなった。あかりをしたって寄って来た魚が、水の中にきらりきらりとナイフのように光った。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ」

と巳之助は一人でいった。しかし②立去りかねて、ながいあいだ両手を垂たれたままランプの鈴なりになった木を見つめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。ながの年月なじんで来たランプ。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ」

それから巳之助は池のこちら側の③往還おうかんに来た。まだランプは、向こう側の岸の上にみなともっていた。五十いくつがみなともっていた。そして水の上にも五十いくつの、④さかさまのランプがともっていた。立ちどまって巳之助は、そこでもながく見つめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。

やがて巳之助はかがんで、足もとから石ころを一つ拾った。そして、いちばん大きくともっているランプに狙ねらいをさだめて、力いっばい投げた。パリーンと音がして、大きい火がひとつ消えた。

「お前たちの⑤時世じせいはすぎた。世の中は進んだ」

と巳之助はいった。そしてまた一つ石ころを拾った。二番目に大きかったランプが、パリーンと鳴って消えた。「世の中は進んだ。電気の時世になった」

三番目のランプを割ったとき、巳之助は⑥なぜか涙がうかんで来て、もうランプに狙ねらいを定めることができなかつた。

問一 ―― ①とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 妻 イ 母 ウ 友達

問二 ―― ②とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 急いでさっさと立ち去ったということ。

イ なかなか立ち去ることができないこと。

ウ 立ち去るために金が必要だということ。

問三 ―― ③とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 往復する イ 道 ウ 環境

問四 ―― ④とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア ランプのあかりが池の水面に映っていたということ。

イ ランプが上下を逆にしてぶらさがっていたということ。

ウ 辺りが暗くてランプがはっきり見えなかったということ。

問五 ―― ⑤とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしくないものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 時代 イ 世の中 ウ 当時

問六 ―― ⑥とありますが、このときの巳之助の気持ちとして、もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア おかみさんに内緒でランプを割ってしまったことを後悔している。

イ 五十個ものランプをこれから割らなければならぬので困っている。

ウ 自分の人生を変えたランプへの強い思いで胸がいっぱいになっている。

こうして巳之助は今までのしょうばいをやめた。それから町に出て、新しいしょうばいをはじめた。本屋になったのである。

*

「巳之助さんは今でもまだ本屋をしている。(1)今じゃだいぶ年とったので、息子が店はやっているがね」

と東一君のおじいさんは話をむすんで、冷めたお茶をすすった。巳之助さんというのは東一君のおじいさんのことなので、東一君は②まじまじとおじいさんの顔を見た。いつの間にか東一君はおじいさんのまえに坐りなおして、おじいさんのひざに手をおいたりしていたのである。

「そいじゃ、残りの四十七のランプはどうした？」

と東一君はきいた。

「知らん。次の日、旅の人が見つけて持ってったかも知れない」

「そいじゃ、家にはもう一つもランプなしになっちゃった？」

「うん、ひとつもなし。この台ランプだけが残っていた」

とおじいさんは、ひるま東一君が持出したランプを見ていった。

「損しちゃったね。四十七も誰かに持ってかれちゃって」

と東一君がいった。

「うん損しちゃった。今から考えると、何もあんなことをせんでもよかったとわしも思う。岩滑新田に電燈がひけてからでも、まだ五十ぐらいのランプはけっこう売れたんだからな。岩滑新田の南にある深谷ふかだになんという小さい村じゃ、まだ今でもランプを使っているし、ほかにも、ずいぶんおそくまでランプを使っていた村は、あったのさ。(3)何しろわしもあの頃は元気がよかつたんでな。思いついたら、深くも考えず、ぱっぱとやってしまったんだ」

「馬鹿しちゃったね」

と東一君は孫だからえんりよなしにいった。

「うん、馬鹿しちゃった。しかしね、東坊——」

とおじいさんは、きせるを膝ひざの上でぎゅッと握りしめていった。

「わしのやり方は少し馬鹿だったが、わしのしょうばいのやめ方は、④自分でいうのもなんだが、なかなかりつぱだったと思うよ。わしの言いたいのはこうさ、日本がすすんで、自分の古いしょうばいがお役に立たなくなったら、すっぱり⑤そいつをすてるのだ。いつまでもきたなく古いしょうばいに⑥かじりついていたり、自分のしょうばいがはやっていた昔の方がよかつたといったり、世の中のすすんだことをうらんだり、そんな意気地のねえことは決してしないということだ」

東一君は黙って、ながい間おじいさんの、小さいけれど意気のあらわれた顔をながめていた。やがて、いった。

「おじいさんはえらかつたんだねえ」

そしてなつかしむように、かたわらの古いランプを見た。

問一 (1) にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア なげなら イ さて ウ もっとも

問二 —— ②とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア じつと イ 疑いつつ ウ ぼんやりと

問三 (3) にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア だから イ しかし ウ それなら

問四 —— ④とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 自分で言うのはえらそうだが
イ 自分では意味がわからないが
ウ 自分が言うことは当たり前だが

問五 —— ⑤とありますが、何のことですか。もっともふさわしいものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア 日本
イ 言いたいこと
ウ 古いしようばい

問六 —— ⑥とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしくないものをア～ウから選び、記号で答えなさい。

ア すがりつく イ しがみつく ウ かみつく

解答

1 問一 かくれんぼ
 問二 すき
 問三 ウ
 問四 ア
 問五 イ
 問六 ア
 問七 イ
 2 問一 たり
 問二 ア
 問三 イ
 問四 ウ
 問五 ア
 問六 イ
 問七 イ
 3 問一 ア
 問二 ア
 問三 ア 人力車
 問四 ア イ 時間
 問五 ウ 重い
 問六 ア
 4 問一 大野
 問二 ア
 問三 イ
 問四 イ
 問五 ウ
 問六 ア

5 問一 ア
 問二 イ
 問三 イ
 問四 安い
 問五 巳之助
 問六 ア
 6 問一 イ
 問二 ランプ
 問三 ア
 問四 ア
 問五 ウ
 問六 四つ
 7 問一 ア お金
 問二 ア イ たのしかった
 問三 ウ
 問四 ア
 問五 イ
 問六 熱心
 8 問一 ウ
 問二 イ
 問三 ア
 問四 ア
 問五 ウ
 問六 電気
 9 問一 イ
 問二 ウ
 問三 ア
 問四 イ
 問五 ア
 問六 ウ

問六	問五	問四	問三	問二	問一	13	問六	問五	問四	問三	問二	問一	12	問六	問五	問四	問三	問二	問一	11	問六	問五	問四	問三	問二	問一	10
ウ	ウ	ア	イ	ア	ウ		ウ	ウ	ア	イ	イ	ア		ア	ア	4	イ	ア	イ		ウ	ウ	イ	反対	ア	ア	
															巴之助	4											
															イ	5											
															区長さん	新しい											

1

問五 二つ前の段落のおじいさんの台詞の最後に、

「外に行けば、電信柱でも何でも遊ぶものはいくらでもあるに」とあります。おじいさんの言ったことが本当だったので、「なるほど」と納得する表現があてはまります。

も、ということとは、実際にはお金がないという事です。したがってここは、「時間がない」

ことを強調したい文章ではなく、「お金がない」ことを伝えたい文章だといえます。

4

問二 傍線部を含む一文で、「行燈」と「ランプ」を比べていることがわかります。

問七 直前に「また」とあるので、おじいさんが

前に言った台詞から探しましょう。

問三 直後に、「人間は誰でも明かるいところから

暗いところに帰るのを好まないのである」とあります。ここでいう「暗いところ」とは、

2

問三 現代ではほとんど使わない表現ですが、子

守や家事などのために雇われている少女のことを「ねえや」と呼びました。童謡『赤とんぼ』の歌詞にも「十五でねえやは嫁に行き」とありますね。

問五 ウは巳之助の村での生活、オは巳之助自身の行動です。

5

問三 直後の会話から、値段に関する話をしているのがわかります。

問六 「つまり」の直前と直後は同じ内容です。

問七 ウと迷うかもしれませんが、動物に仕込む「芸当」ならウで構いませんが、東一君のくせを表す表現なのでイが正解です。

問四 卸値・小売値という言葉を知らなくても、

直後に、「たとえば、村の雑貨屋は…」と具体例が挙げられています。草鞋の卸値が一銭五厘、小売値は二銭五厘とあるので、卸値の方が一銭安いことがわかります。

3

問一 直前に、「子守をしたり、米を搗いたりして

一生を送るなら男とうまれた甲斐がない」とあり、巳之介はそれ以外の何か大きな仕事をしたいと思っていることがわかります。

問五 直後の「おめえがランプ屋？」という台詞

から、巳之助がランプ屋であることについて笑っていることが読み取れます。

問二 直後に「本一冊買うお金もなかった」とあ

るので、非常に貧しかったことがわかります。その直後には「たといお金があつて本を買つたとしても、読むひまがなかった」とあるのでイと迷いそうですが、「たとい」は「たとえ」と同じ意味です。たとえお金があつたとして

6

問三 「文明の利器」とは、文明の発達によってもたらされた便利な機械や道具のことをいいます。よく使われる表現です。

問五 一つの場所に行ったついでに、そのまま次の場所へ行くことをいいます。

問六 雑貨屋の婆さんのところに一つ置いてきたランプを婆さんが買い、その他に三人から注文がありましたね。

問五 甘酒屋の言葉どおり、外を見た巳之助が電気の明るさを知ってくやしい思いをしている様子が次の段落に書かれています。

7
問一 次の段落の最初に、「巳之助はお金も儲かったが、それとは別に、このしょうばいがたのしかった」とあります。ランプ売りはお金が儲かった上に楽しかったから「よその家の走り使い」や「子守」をやる必要がないのです。

10
問一 「脳天」とは頭のとっぺんのことです。同じ表現がこの後にもう一度出てきますが、そのときの巳之介は「頭がどうかなってしまっただ」「頭の調子がくるってしまったのだ」と書かれています。

問四 予想どおりのことが起こったときに用いる言葉です。

問三 直後の台詞では、電気の悪い点が挙げられているので反対と考えられます。

8
問三 直後の「ランプの代わりになるものらしいのだが」が手がかりとなります。

11
問一 家に住まわせてもらう、お世話になるという意味の慣用句です。

問四 直後に「電気のことなどまるで知らなかったからだ」と理由が書かれています。

問三 ウと迷うかもしれませんが、ここでは「火打」に限った話ではなく、もっと大きな範囲

問五 直前に、電気について巳之介が感想を言っている台詞があります。「あかりがともるもんかと思つたら」「まるで綱じゃねえか」「雀や燕のええ休み場というもんよ」ということは、あかりがついていなかったので電気は大したものではないと判断したことになります。

12
問四 ランプがさかさまにとめることはできません。水に映っているから、上下が逆に見えるということですよ。

9
問一 直前に「相手がランプ売であることに気がついたので」とあります。電気をほめることは結果的にランプにマイナスの評価をするこ

13
問四 自分で自分をほめるような言葉を言うときに、前置きとして使う表現です。

問二 基本的には「味方をする」という意味ですが、「不当に味方をする」という意味のイで用いられることもあります。

問六 「かじりつく」には、しっかりとくつついて離れないようにするという意味があります。